

特集:ミュンヘン・ハイエンドショー 2016

High End 2016 in Munich 出展社レポート

パナソニック㈱ アプライアンス社 ホームエンターテインメント事業部
井谷 哲也

昨年より1週間前倒しの開催で、ゴールデンウィークに重なった為か、日本から来訪者が増えた。評論家の先生やオーディオ専門店の方々に限らず、国内展示会でよくお見かけする一般の方もおられ、日本での High End の認知度が上がっていることを表している。“CES (Venetian) が段々と地盤沈下しているのと対照的だ!” という方もおられ、それを示すように、世界中からディーラーやディストリビューターが、US からライターが来ていた。今後益々プレゼンスは上がると思われ、我々も本展示会の重要性を再認識した。

全体を見学しての感想で、去年までとの違いは大きく、以下の2点。

① アナログの復権が顕著

もちろんターンテーブルの出展メーカーも増えているが、ハイエンドメーカーでデモにアナログソースを使用するケースも著しく増えていると感じた。詳しく調査していないが多分ハイレゾを使うケースより多い。左は EAR の試聴室、右は Nagra の試聴室。



② ヘッドフォン、及びヘッドフォンアンプの展示の増加

High End 主催側もヘッドフォンを意識している模様で、HörBar というコーナーも設け、各社ヘッドフォンの聞き比べ(シュートアウト)ができる様にしており、終始にぎわっていた。



会場を廻っていても、雨後のたけのこの如く、小さなヘッドフォンメーカーの出展が目についた。もちろん大手の Sennheiser や STAX など大きなブースを構えていた。



【以下はメーカー別レポート】

■ B&O Beolab90

小さなブースだが、Beolab90 をスケルトンで展示し目を引いていた。ツイーター7 台、スコーカー7 台、ウーファー4 台の計 18 台のスピーカーを、300W 4ch×3、300W 2ch×1、1000W 1ch×4 の独立アンプで制御し、定在波補正や、サービス領域制御などを行っている。制御ボードには Sharc 2 個と Marvell の CPU が載っていた。奥にしつらえた試聴室ではモード切替デモも実施。



■ Naim Mu-So

Mu-So (QB) の展示があるものの、CES や英国 Bristol の様に、内部構造展示やガンガン音を出したりせずにあっさり目。一方 Naim の各コンポーネント群は、内部構造まできっちりと訴求。やはりドイツの市場にあわせた展示内容に徹している模様。



■ Pioneer

単コン、マイクロ、新製品ワイヤレスオーディオなどを展示。ブース全体の照明を暗い目にして落ち着いた雰囲気。

下の写真は、新製品 AC-400。2.1ch オーディオシステム、スピーカーは全てワイヤレス接続。Google Cast For Audio 対応 HDMI4 入力付き。9-10 月頃発売の予定で€1000-1200 位とのこと。



下の写真、左はこちらも秋予定の新製品 NC-500 CD, USB, NetWork, DAB+アンプ内蔵。中央はマイクロコンポ X-MS82D、写真では良くわからないが NC-500 同様に大型カラー液晶搭載。右は 804D3 を使った単品コンポデモ。



■ Denon / Marantz

展示フロアのコーナーに位置する広目の部屋を使って商品展示、通路を挟んでその後ろの大きな部屋で試聴、と日系メーカーでは最大規模のブースを構えていた。ここのブースで毎回感心するのは、展示を綺麗に見せるのに拘っているということで、部屋全体の照明から展示のスポットまで丁寧に吟味され、全会場で一番綺麗に展示していると思う。ドイツ人の感覚とはちょっと違うので、多分日本のサポートが大分影響しているのではないかな？ 奥の Marantz の試聴室では、同社欧州アンバサダーの Ken Ishiwata 氏のセッションが催されていた。技術説明・商品説明なしで、淡々とソースをかけ、音楽がいかに素晴らしいかを語りかけていくスタイル。毎回多数の試聴者が訪れており、セッション終了後もファンの方々から質問攻めにされていた。

写真、左は 804D3 を使った Denon のデモ。右は Marantz 試聴室。



■ ELAC

新たに発表されたリファレンススピーカ“Concentro”を展示。ELAC は経営層が代わり、多角化を進めだした模様。CES で発表されていた Discovery Wifi Speaker や Music Server などアンプ、エレキ系商品を展示。加えて、90 周年記念のターンテーブルも発表。ベルトドライブで MDF 筐体。カラーバリエーションもあり。



■ KEF

昨年、Brade2 を大々的に聴かせていたが、今年はトーンダウンして、Egg / Muo などポータブル系に注力。



Egg

Digital Wireless Music System

Muo

Wireless Music Speaker

■ OCTAVE

日本でも有名な真空管アンプメーカー。Hi-Vi やステレオサウンド誌の受賞盾を多数陳列し、日本のユーザーにアピール。ホフマン社長自ら最終日まで陣頭に立ち、対応されていた。



■ Silbatone / GIP

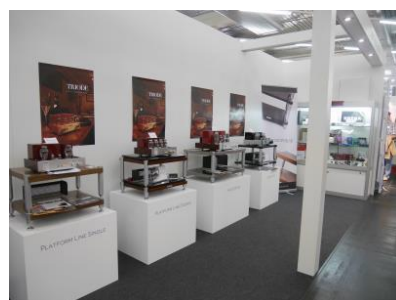
中国の真空管アンプメーカーと山形のスピーカメーカー GIP のコラボ。旧 Western サウンド復刻を目指したモノで、古きよきビンテージサウンドを聴かせていた。私が訪れた時は Led Zeppelin を聴かせていたが、中々のモノだった。

GIP は、以前フォスターのユニットも手がけていた日本のスピーカメーカー。地元山形は紙すきの産業が盛んで、その技術を活かして独自のコーン紙を作り、15 年ほど前から Western 互換ユニットを製造販売されているとのこと。意外なところで頑張っている日系メーカーである。



■ TRIODE

頑張っている日系メーカーのもう一つの例が、真空管アンプメーカーの TRIODE。山崎社長自ら出張。法被を着て Japan ブランドを訴求されていた。TRIODE は山崎社長就任以来、着実に海外でのプレゼンスを伸ばしている模様。



■ MELCO、スフォルツアート、SPEC、

更にマニアックだが、こちらも日系のメーカー共同ブース。スフォルツアートは高級 Net Audio の新興メーカー。SPEC は Pioneer の OB が作ったメーカーで、数年前のこの High End ショーに出展し、デジタルアンプで世界進出を果たし、最近では高級ターンテーブル等も手がけている。



■ Axiss

日本の輸入商社 Axiss の暖簾分け商社。主に日系の商品を輸出。AirTight も扱われ、何時もの如く A&M 三浦社長以下で対応されていた。PhaseMation のカートリッジも輸出されている。

■ Sibatec inc

ほとんど個人でやっておられる様な代理店もある。Viiv (トーンアーム) など日本製品を扱われている。写真左と中央は Axiss、右は Sibatec inc。



【以下はターンテーブル関係】

■ Project

業界最大手の Project は広々とした空間でフルラインアップ展示。地域のレコード売り上げに比例したプレーヤーの売り上げを目指しているが、欧米に比較すると日本での知名度はまだ低い。



■ Rega

アンプで有名なメーカーだが、展示を見るとターンテーブルのラインアップも多い。€380 辺りの普及機から、上は€6000 くらいまでを揃える。さすがに€380 はシェル部分が樹脂。

写真中央は Queen Edition €500。



■ Thorens

ターンテーブル老舗の Thorens も健在。価格的には€1099~9999 と中高級機を揃える。日本・US にも輸出されており、オールドマニアには魅力的なのかも。トーンアームも自社製で、独自の低重心ウェイトを採用している。



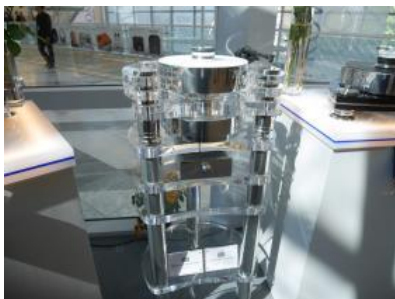
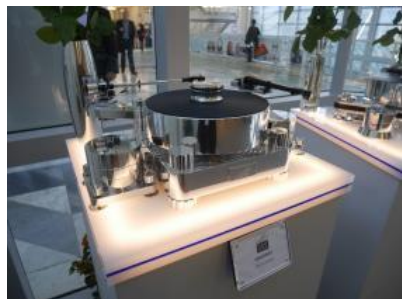
■ EMT

こちらもターンテーブル老舗。プレーヤーや真空管式フォノイコライザー(写真左上段)などを展示。どちらかというとビンテージっぽいところを狙っている模様。



■ Trans Rotor

地元ドイツの高級ターンテーブルメーカーで、デモにここのプレーヤーを使っているブースも多い。€2000 クラスから、上は€118000 まで、またプライス未定の高級機もあり。



■ Acoustic Solid

こちらも地元ドイツの高級ターンテーブルメーカーで日本にも輸入されている。Trans Rotorよりは少し普及機寄りな感じで、やはり、ここをデモに使っているメーカーも多い。モーターはほぼ全機種同じものを用い、キャビとプラッタ代えて機種展開している模様。



■ オーディオテクニカ

高級 MC カートリッジ AT-AR1000、€5,200 の発表で注目されていた。国内発売は未定との事。針のすぐ真下にコイルを配置するユニークな構造で、カンチレバーはボロン無垢。インピーダンス 3Ω で出力 0.2mV 。PMC の小型スピーカーでの試聴なので条件は必ずしも良くないが、高級 MC らしい高解像度な低音が再生されていた。写真右は 10 倍モックで、コイル構造、磁気回路構造がよくわかる。



■ オルトフォン

写真左は SPU の新モデルの SPU #1 S。€545 の戦略価格で注目されていた。日本で発売する予定で、カムバックマニアを狙った商品。SPU でこの値段だと、古くからのマニアの触手が伸びるのは必至か。



■ ナガオカ

英国 Bristol でのショーの時と同様、地元のディストリビューター Tonar が展示。写真右は JELCO のトーンアーム。



■ EAT

日本でも US でも良く見かけるプレーヤー。特徴があるメーカーではないが、トーンアームも自社製。堅実な創りで信頼されている。



■ Reed

日本でも昨年から Eilex が輸入開始した Reed は、ベルト・リムドライブ切り替え方式。特にリムドライブ時の音質に定評があり 300 万円を超える価格にもかかわらず、日本でもそれなりに売れているとのこと。また同社のトーンアームはアジマス調整付きのユニークなものでこちらも注目されている。写真中央はベルト・リムドライブ切り替えの様、右はトーンアーム基部のアジマス調整機構。



■ TEAC

普及機クラスではトップシェアとのこと。カラーバリエーション展示。



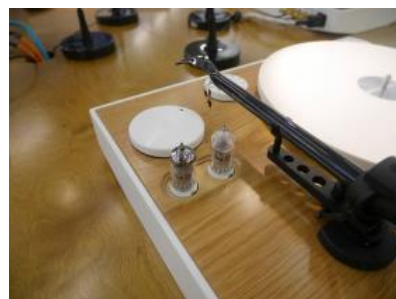
■ Goldring

Trans Rotor と共同でブースを構えていたカートリッジメーカーの Goldring。MC カートリッジのコイル巻き実演をしていた。高級 MC の展示もあり。



■ ON G Pinto

イタリアの G Pinto という会社の ON (Old Technology / New Technology の略)。真空管アンプ搭載、アナログ入力、同軸・光入力、USB 入力つきターンテーブル。ターンテーブル自体はトイプレイヤー的だが、アームは Project 製とか。



■ Acoustic Signature

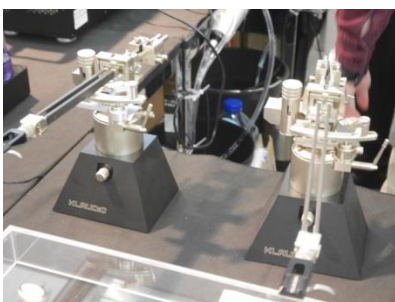
あまり聞かないメーカーだが、超ド級も含めラインアップも豊富で、トーンアームも自社で揃えている。



【その他トーンアーム関係】

いくつかのガレージメーカーから、トーンアームに対する提案があった。主には二点で、一点目は、トラッキングエラーへの対応。リニアトラッキングにするか、アーム 2 分割し、平行四辺形型のメカでキャンセルするか。二点目は再生しながらアジマス調整ができる機構。最近アジマスを気にする人が多く、特にテストディスクを再生させながらの調整が必要と言う。これからのトレンドになるかもしれない。

各社のトラッキングエラーキャンセルアーム



アジマス調整付きアーム（右）とリニアトラッキングアーム



【その他 雑情報】

会場には数店の新品・中古レコード屋が出店しているが、そのうち一店は日本からの中古品専門店。そもそものカッティング条件が良いという理由と、日本のマニアは保存に気を使うということから、日本の中古レコードは人気の模様。レコードに帯が付くのも日本の特徴だが、その帯も日本製の印として、マニアの間では受けているとか。なお、会場には、ここを含め数店レコードショップがあり、日本では手に入りにくいディスクの在庫も多く、出張時の楽しみの一つであるが、クレジットカードが使えないお店が多いので、行かれる時には注意されたい。



下の写真左は Technics 現地スタッフが中古レコード店から購入した旧 Technics のデモレコードセット。€600 でミント状態。右は昨年末にドイツで発刊されたアナログ専門誌 Mint。全世界的にアナログ関係誌が増えている模様。創刊号で昨年 IFA での Technics ターンテーブル開発発表が取り上げられている。公称発行部数は 45,000 とのこと。



【最後に】

■ Technics

会場エントランスに SL-1200 巨大広告を設置。頑張りました！ブースは昨年と同じ場所。目立たなかった反省から屋根に Technics の看板を上げた。やはり SL-1200 の効果か、昨年に比べ Technics の認知そのものはかなり進んでいる模様で、いつも人だかりしていた。今年の新製品 SL-1200, G30, T700, C500, C550 を中心に展示。



昨年同様に奥に試聴室。今年は、SL-1200GAE、SU-G30、SB-C700 と、SC-C550、SB-C700 の 2 システムをデモ。ケーブルのシールドを DC72V に繋ぐ方式が流行っているらしく、試聴室のシステムに導入。調達してきた現地の担当者曰く、「効果は絶大！」とのこと。写真中央がスピーカーケーブルのシールド用、右がフォノケーブル用。



やはり、SL-1200 の注目度が高く、熱心なお客はデモの後も長時間説明員を質問攻めにしていった。説明員達も自ずと気合が入り、試聴室内は会期中ずっと熱を帯びていた。

また昨年同様、カップル・家族連れが目立ったのも日本の展示会と異なるところである。



このようなシャツを着て訪問されるファンの方々も多くおられ、どなたも説明員や受付嬢相手に、嬉しそうに、熱く、”SL-1200 愛”を語られていたのが印象的。つくづく世界的に愛されていたモデルであることを実感した。但し、受付の女性達は外部スタッフで知識が乏しく、彼らにはちょっと引き気味であった。



著者プロフィール



井谷 哲也（いたに てつや）

1980年松下電器産業（現パナソニック）株式会社入社。
CD プレーヤー、レーザーディスクプレーヤー、DVD プレーヤー、
BD レコーダー等の商品開発を経て現職。

現職： パナソニック(株)、アプライアンス社
ホームエンターテインメント事業部、
テクニクス事業推進室、チーフエンジニア。